



海外勤務者に対する渡航ワクチン接種

おだ内科クリニック 小田 健司

海外勤務におけるリスクのなかで感染症対策は、疾病やメンタルヘルス、交通事故、治安やテロ対策と並んで重要な位置を占めている。本セッションでは、海外で注意すべき感染症の知識、渡航ワクチンを接種する場合の考え方、帯同家族に対する予防接種、さらに予防接種の実際について述べる。

1) 渡航のリスクと感染症

途上国滞在中の感染症は、旅行者下痢症のように「頻度は高いが死亡率は低い感染症」から、日本脳炎や狂犬病のように「頻度は低いが死亡率が高い感染症」まで様々あるが、特に知っておくべき感染症とその世界分布について紹介する。日本人が持つ各疾患に対する感染防御力は、保有する抗体価が目安となる。この抗体価や保有率は年齢によって大きく異なる場合があり、この差は小児期の予防接種の有無によるところが大きい。今回は現在国内で承認されている接種可能なワクチンについて、その種類と特徴を紹介する。さらに未承認ワクチン（輸入ワクチン）の中から腸チフスワクチン、ダニ脳炎ワクチン等を紹介する。

2) 海外勤務者に渡航ワクチンを接種する場合の考え方

渡航先で必要とされるワクチンを選択するための情報源として「海外渡航者のためのワクチンガイドライン/ガイダンス」のほか、厚生労働省検疫所が運営する FORTH と米国 CDC のウェブサイトが有用である。正しく有効な予防接種のためには、生まれてから現在までの予防接種歴を把握し、行われる予防接種が定期予防接種（Routine vaccination）ないしその追加接種か、渡航先の地域で流行している感染症予防のために推奨（Recommend）されているのか、渡航先の国が入国者のために必須（Required）として接種を要求しているかを把握しなければならない。さらに急な出張などで渡航までの日数が短く、既定の接種回数を行うことができない場合の対応についても述べる。一方、家族も帯同する場合は配偶者や子供にも予防接種が必要である。女性の場合、妊婦の場合、帯同子息が現地で就学を予定している場合、などの予防接種も理解しておかなければならない。

3) 予防接種の実際の手順

渡航ワクチンを接種する医師は、一人一人の接種歴や年齢、渡航先の感染症情報から必要と考えられるワクチンを選び、重要度や渡航までに有効な接種が可能かも考慮の上で、接種スケジュールを作成する。実際の接種手順は一般の予防接種と同じであるが、渡航ワクチンの場合は同時接種が多いこと、次回接種を行う時期の説明、感染症予防の指導などを同時に行っておくことが望ましい。なお予防接種記録は各施設独自の予防接種記録カードや WHO が有料で頒布している国際予防接種証明書などに必ず記載する。接種記録は個人の医療記録ならびに企業の健康管理記録としても重要なため必ず発行するようにしたい。